

～「いわて塩の道」を知ろう～

平成31年地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名： 「いわて塩の道 野田街道の歴史と文化の検証」

研究代表者： 盛岡短期大学部教授 松本博明

課題提案者： 岩手県盛岡広域振興局

研究メンバー： 岩淵謙悦・小岩幸恵（盛岡広域振興局経営企画部）

技術キーワード：いわて塩の道、交易史、闘牛、地域伝承と文化、資料DB

▼研究の概要（背景・目標）

野田村から久慈市（旧山形村）を通り盛岡へと続く野田街道（塩の道）は、資料の編纂や民間の取組による道の保全活動が行われるなど地域の歴史的な遺産として自認されている。しかしこうした遺産・資源を軸として、広域的な連携による効果的な取り組みを進めていくためには、「塩の道」全域の検証が不可欠であり、更には周辺の地域に与えた影響の歴史的・文化的意義を明らかにすること求められている。

▼研究の内容（方法・経過）

関係する各市町村あるいは地区において個別にまとめられ刊行されるなどしている「塩の道」に関する研究調査、伝承の記録・データ、資料を幅広く収集し、「いわて塩の道関係資料文献目録」を作成し、今後の研究、調査に役立つベースを作ることを目的とする。

また、実地調査による聞き取り、資料収集、確認などを中心に、「塩の道」に関わる歴史、文化、くらし（民俗）、産業、流通など、「塩の道」にかかわる様々な事象について、有機的連関を持たせながらとらえ、収集し、整理分析する。

▼研究の成果（結論・考察）

「いわて塩の道」は複数存在したことが判明している。その中で「野田街道」が大動脈となった理由は、本街道が塩だけでなく沿岸の砂鉄、海産物と内陸の米、農作物とを交易する物流の豊富さ、盛岡だけでなく鹿角、さらには盛岡を過ぎて沢内から山脈を抜け新潟に至るまで、長大な交易路を形作っていたこと、八戸から盛岡に向かう街道の一角を占めていたこと、旧山形村に代表される高い牛方の能力が寄与した。

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

「塩の道マップの作成」それによって塩の道の持つ歴史的意義が裏付けられ、地域において塩の道の認知度が向上するとともに、所縁を持つ食文化や風俗を活用した商業活動の活発化や広域連携、観光への活用による交流人口の増加、地域の活性化に寄与することを次の展開とする。

『鹿角市史』によれば野田鉄は牛の背に付けやすいように加工された粗鉄、延鉄で、尾去沢銅山での銅採掘需要と鹿角鎌に代表される丈夫で軽い農具に加工されて、遠く津軽や仙台まで売り出されていた。野田街道を往来した牛は能力が高く、中越の燕・三条を中心とする金属産業の礎を築いたのも野田鉄と言われ、鉄を運搬した牛もその能力を看板に、彼の地で販売された。

高低差のある山道を滞りなく荷駄を運ぶためには、牛がお互いの優劣を自覚していることが必要とされ、最強牛を先頭に立てると後続の牛は従順にその牛に従った。闘牛はそのため必要な仕事であった。



旧山形村の闘牛

新潟県長岡市の山古志などに闘牛文化が栄えたのは、山形村の牛方が塩の道は、岩手県内だけでなく、鹿角、新潟といった広域交流圏を作りながら、発達してきたことになる。



野田街道「塩の道」
岩手文化情報大辞典より